

特集 ③

地域産品を活用した取り組み

リネウ 代表 佐藤 友佳理 (西予市)



■和紙制作に取り組むことになるまで

現在、私は、西予市宇和町明間の古民家を工房に手漉き和紙の制作をしています。美しい自然に囲まれたこの明間には、名水百選に指定されている観音水が湧き出ています。集落では生活にも観音水が使用されており、私どもの和紙もこのきれいなお水で漉いています。



会津若松アルテマイスター

この場所に工房を構えるまでは、私の育った手漉き和紙の里、内子町の五十崎で同じく和紙制作を行っていました。なぜ、私は和紙を漉き始めたのか。私は18歳まで、内子町五十崎で過ごし、フアッションモデルになることを夢見て東京に上京しました。それから3年後、東京で叶わなかった夢は、留学した先のロンドンで不意に叶うことに。

朝から晩まで、ロンドンの街中を駆け巡り、オーディションを受ける、刺激的な毎を送り、時には仕事でスペインやアイルランドへ行くことも。いろいろな国に赴き、現地の方々と交流するたび、地域の多彩な個性に驚きました。そして、帰国。東京でもモデル活動が続けるも、なかなか思ったように行かず悪戦苦闘の日々を送る私に、地元、内子町五十崎の手漉き和紙を復興させる試みが経済産業省のジャパンブランドという助成金事業に採択された、と父から知らせがあり、海外に出た事で自国の文化、伝統に改めて興味を持っていた私は、何かできないか？と強く思うようになりました。その後、一念発起した私は東京のデザイン専



内田繁茶室

門学校に入学し、デザインの基礎を勉強することにしました。「いつか和紙に携われたらいいな」と思っていたら、2年間の学生生活の後半には、父の会社が手がけ始めたインテリア和紙事業の商品開発や販路開拓を任せられ、愛媛と東京を行ったり来たりしながら、学校の課題と奮闘する充実した日々となりました。2010年、卒業と同時に、半年かけて制作した和紙のお披露目を東京のギャラリーで開き、来客者の反応から、インテリア向けの和紙への可能性を強く感じた私は、愛媛に帰り、和紙制作をすることを決意しました。

■女性の視点と地域の個性

私どもの和紙は「呼吸する和紙」と名付けられており、通常の手漉き和紙と違って、和紙のこより糸を編み込んだものを漉き上げる手法や、軽やかな表情、店舗や室内の使用を想定した大型の和紙であること、そして湿度調節機能や、消臭効果を持っているところからです。

呼吸する和紙のモビール (パ
ランスタイプ) 4200 円



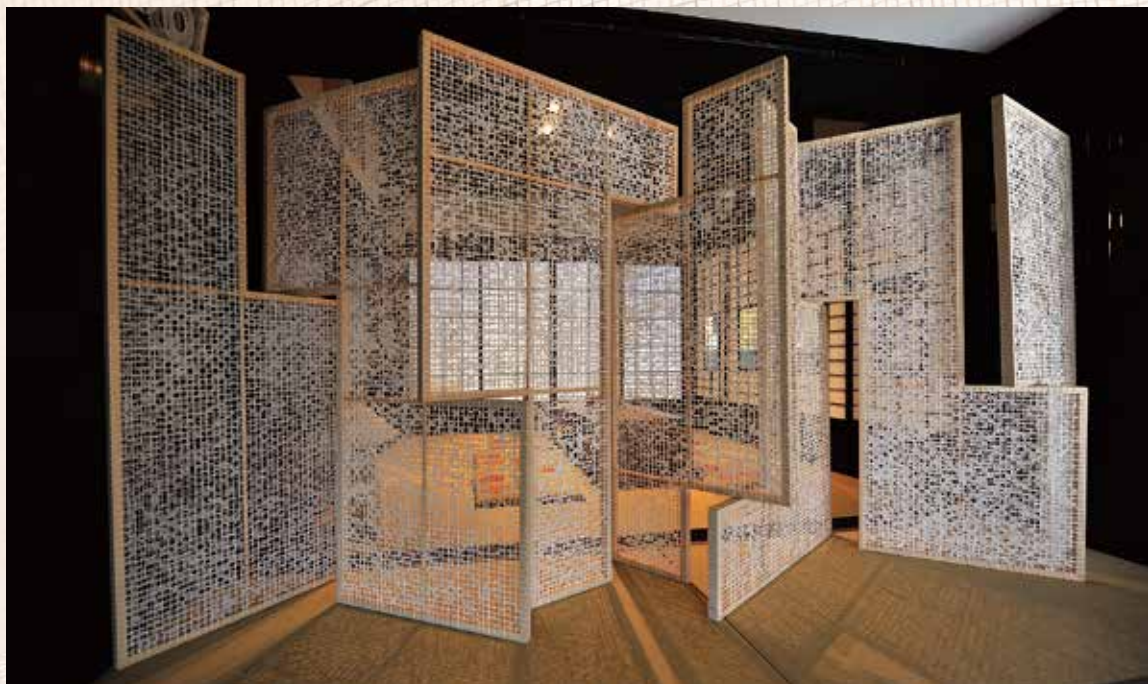
「伝統的に使われてきた和紙という素材を、いかに現代の住空間に取り入れたいかなるデザインにするか。」

その課題に答える要素を充分に持った「呼吸する和紙」の展開を考えるのはワクワクする作業であり、最初に「呼吸する和紙のモビール」という商品を開発したことで、自分の中で大きな飛躍がありました。モビールとは、ヨーロッパでは、子供向けの知育玩具や、インテリアとして用いられるもので、てぐす等で吊るし、空気の変化で穏やかに揺れるオブジェです。最近では、日本でもたくさんの種類のモビールがみれるようになりました。住空間を心地よく過ごすことへの関心の高い女性に向けて何か、和紙の商品をつくれないうかと思えた私は、和紙のモビールを作ることになりました。試作を重ねた末、レースのような素材感の和紙パーツが揺れる和紙のモビールが完成しました。おかげさまで、私が望んだとおり、感度の高い女性方から「癒される」「やさしい気持ちになる」等の好評を頂くことができました。毎日、忙しく働く女性たちに、ほんの少しの安らぎを与えられる存在、そういったコン

セプトはまさに、和紙の優しい素材感とびつたりなのです。

そして、もう一つ大切なのは、私がこの和紙を制作する場所なのだと思います。「呼吸する和紙のモビール」のパッケージには「緑に囲まれた山あいの、きれいな水で流れている」ということをお伝えしています。工房のある明間の魅力余すことなく使わせて頂く。そういった、この場所にしか無いものを打ち出すことで、個性が光るのだと思います。

海外や東京での生活を経て、戻ってきた故郷の良さ。それに気づくことが出来たのは、私にとって最大の幸運であり、今後、女性独自の視点も含めながら、自分の足元の宝物を更に磨き、その輝きを発信していければと思います。そういった活動をする人が増えれば、地域の人みんなが宝探しを始め、自分の住む場所こそが宝の山だということに気づき、発信していく、というループが地域の活力となっていくのだと思います。



ランダム和紙ついたて